

記録

シンポジウム

「先志摩の魅力を一緒にしゃべろうや～人と自然、今と昔～」

移動展示「先つちよ志摩に生きる」関連行事

開催日：平成29年3月11日(土) 13:30～16:00

開催場所：磯部生涯学習センター多目的ホール

三重大学と三重県総合博物館は、平成26年度から平成28年度までの3年間、共同で先志摩半島の自然と歴史・文化について総合的な調査研究を行ってきました。その調査研究の成果と地域の魅力を紹介するために行った、移動展示「先つちよ志摩に生きる」の関連行事として開催したシンポジウムの記録です。

〔主催者挨拶〕 三重大学学長 駒田美弘



皆さんこんにちは、三重大学学長の駒田でございます。今日は三重県総合博物館と三重大学との連携シンポジウムにご出席たまわりまして大変ありがとうございます。先ほど黙祷いたしました通り、今日は3月11日ということで、私も先の大震災で亡くなられた方々のご冥福と、被災地の一刻も早い復興を祈念したいと思います。さて、三重大学では昨年度から、皆様方ご存じの通り、地域に根ざし世界に誇れる独自性豊かな教育・研究の成果を生み出し、その成果を地域の活性化にということを決意し、そのための人作り、街作り、仕事作りを進めております。仕事作りとは、大学でしっかりと世界トップレベルの、あるいはオンリーワンの研究・教育をしっかりと行い、それを世界へ全国へ発信しようということでございます。人作りは、たくましい地域のリーダーとなるような、もちろん全国・世界に羽ばたいていただけるような人材を育成しつつ、もう少し地域のリーダーとして残っていただきがんばっていただければということをおもっております。なお、三重大学はここからですとかなり時間がかかる津市にあります。三重県は南北に170キロありますから、霞ヶ関から掛川までの直線距離であります。大学としてはもう少し身近に大学を感じてほしい、地域の活性化の拠点となる学舎、サテライトを作りましょうということで、街作りというものを考えております。平成28年度伊賀、東紀州サテライトを設置し、活動を開始しようと思っております。また平成29年度は伊勢志摩サテライトを設置し、学生がここに来て研究をしたり教育を受けたり、地域で皆様方と一緒に非常に貴重な時間を過ごせるようにと考えています。今回の企画は三重県総合博物館と三重大学、志摩市、特に歴史民俗資料館の三者がしっかり連携をして、1階にすばらしい展示がございます。この場で研究の発表をするという非常に画期的なことだと思います。私自身は、三重県出身、津市出身で、津市の学校で教育を受け、三重大学で学び、三重大学の医者になり、そのまま三重大学の学長になりという生活を送って参りました。小児科医ですので、こちら志摩市へは鶴方の志摩病院に月2回、3～4年通わせてもらいました。色々な所の方とお近づきになれまして、志摩市の良さはある程度知っていたつもりでしたが、今回の展示を見ますとまだまだだと思われました。いずれにせよ、三重大学は今後地域の活性化のために、地域の皆様方と手を組んでパートナーシップを結びながら、事業を進めていきたいと思っております。今回の事業がそれらのきっかけになればありがたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。今日は少しの時間ではありますが、皆様方にとりましてこの企画が実り多いものになりますよう祈念いたしまして、私の挨拶を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。



写真 今回の調査で多く利用した越賀村絵図（全体）※以下表記のない資料はすべて越賀郷蔵の文書です。

「越賀の村絵図を読み解く」

菅原洋一（三重大学）

三重大学で建築の歴史をやっております菅原と申します、3年にわたって調査をいたしまして、地元の方に大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。今日も越賀の方が大勢おいでということでございます。私は津で生活しておりますので、よそ者がさも見てきたようなことを申し上げることになるかと存じますが、どうかご容赦をお願いしたいと思います。

これが、現在展示しております越賀の村絵図です。今日は、これを素材としてお話をさせていただきます。この絵図は、北を下に南を上を描かれており、現在の地図と異なるためこれからはひっくり返してお話させていただきます。

この村絵図、いったい誰が、いつ、何のために作ったのかからお話をさせていただきます。普通、村絵図といいますが、領主がつくらせることが多いのですが、その場合は目的がはっきりしていて、年貢を取立てるためや村の支配のための基礎資料として、どこに田があるのか、どこに道が通じているかということを描かせるわけです。ところが、この越賀の村絵図はどうやらそのようなものではないということです。これが一つ目の特色です。

作られましたのは、安政2年（1855）正月です。この時は、いわゆる安政地震とよばれる嘉永7年（1854）11月に起きた地震から、1～3か月しかたっていない時期でした。この様な時期に絵図をつくったということになります。庄屋の小川三右衛門という人が中心になって作ったのですが、そんな時期にそんな短期間で絵図を作ることが出来たのか、庄屋さんはもっと他にしなければならないことがあったのではないかと色々疑問も出て参るわけです。

しかし、結論としてはこの時期で間違いなさだろうと思っております。これは領主や奉行がつくれといったわけではなく、庄屋の小川三右衛門が作ろうということ考えたのでした。そして、庄屋の小川三右衛門の所にちょうど逗留していた、今の南伊勢町小方竈の野村訥斎という絵師に絵図を描いてもらったのです。その頃、越賀にはいいお医者さんがいたようで、訥斎は自分の奥さんの病気を治すために越賀にやってきて、庄屋さんの家に寄宿していました。なお、志摩には他にも片田など、野村訥斎の絵がある所がございます。

ます。

では、なぜ絵図が作られたかということになります。これは、展示もいたしました資料（「諸帳面願書数通口上控帳」〈天保14〉）に記してありまして、越賀にはこれまで詳しい絵図がなかったので、庄屋自身が何日間かけて海岸部、瀬の深い浅い、家、屋敷、田畑、山、谷、川、英虞湾側の道や家、こういったものまでことごとく調べて絵図にしたとあります。ことごとくといいますのは、実際に測量した数値が入っています。距離や海の深さまで記されています。

次に、何が描かれているかということ、越賀の人家のあった部分を中心にお話させていただきます。絵図にインデックスにあたる部分がありますが、田、畑、道、海、草場といった色分けになっております。これをもとにして見ていきますと、まず海があります。海が二通りの色になっています。少し濃い色と浅い色の所と。浅い色の所は船が出入りする所ですので、距離も書かれています（写真1-1）。濃い色の所は岩が露出していますので、藻場でありまして、これが海女さんの仕事場になります。また、白い筋が入っておりますが、潮の流れをあらわしています。浜があつて、黄色い色は畑の色です。実は黄色は地形でいいますと尾根になっています。そして、その尾根に挟まれて谷があり、谷は水田として利用されています。越賀は水が乏しい所だったといわれますが、白い筋で川が描かれています。この川を水源にして水田耕作を行っていたのです。今の状況を見ますと、尾根は人家になり、尾根の奥の方には畑があつて名物のお茶が栽培されています。本来水田だった所は今は耕作が放棄されて荒れ地になっております。

そして、この絵図はどれくらい正確に書かれているのかということです。地元の方にお世話になりまして、ずっと歩いてみました。絵図に描かれている道を赤に



写真1-1 二種類に色分けされ、距離も書かれた海（越賀村絵図）

して、絵図にはない道を緑色にして把握してみますと、絵図にある道、赤い道は今も実際にあるんです。それは地形でいいますとだいたい尾根と重なります。逆にいいますと、尾根の部分は絵図が描かれた江戸時代の終わりと道の状況は変わっていない、江戸時代の終わりには開発がひと段落ついていたということになります。そして、絵図に書かれていない緑色の道はどこにあるかという、谷の部分にあります。そして、谷と尾根をつなぐような道が、後からできてきます。つまり、絵図からは、越賀では尾根の部分の道がもともと使われていた道で、谷筋などの道は後からつくられた道だという状況がわかります。

それから、この絵図には開発の記録が書かれていません。丸で囲った所ですが、例えば「宝永四年開発」という文字が書かれています（写真1-2）。これを確認しますと、もともと家があつて、畑がある、その周辺に江戸時代中頃の新しい開発があつた。開発される前は山林でしょうから、山の木を切って開いて平らな土地をつくって利用したということです。

このように、越賀で村をつくる、生活をしていくということは、尾根筋をどうやって使っていくのかということであつたのです。つまり、尾根を切り開いて道をつくっていく、あるいは屋敷地をつくっていく、畑をつくっていくということをいたしますので、このように斜面を切りますと、土止めのために石を積んだ道ができます。そして、地形にあまり逆らわずに道をつくるということをやりますから、道は曲がりくねって、高低差もあるということになります。越賀のおもしろい風景・景観というのは、越賀の村がつくられてきた過程を非常によくあらわしたものだと思われます。

それから、絵図に描かれている家は向きがまちまちです（写真1-3）。この家というのは、絵空事で適当に描いたというわけではなく、地元の方がこの絵図を

見ると、これは誰の家であるかということがちゃんとわかるとおっしゃっています。ということで、この家の表記は正確にあるべき位置にあるべき家を描いているわけですが、それでいきますと、家の向きがあっちを向いたり、こっちを向いたりしている。それは、越賀の村のつくられ方が反映されているということです。つまり、ひとつひとつの敷地が尾根を切って、あるいは土を盛ってつくられていく。そして、その敷地の形状にあわせて建物を配置していくということです。これが平野部の農村ですと、家はだいたい南を向く、建物の向きがみんな同じ方向を向くわけです。あるいは、土地があまりない漁村ですと建物がみんな海の方を向くということがあります。しかし、越賀ではひとつひとつの建物が、その敷地の中で最適な方向を向いているということです。

また、敷地の面積について申しますと、あまり極端に大きな敷地、小さい敷地はないということがいえます。敷地の大きさは、どこもよく似た感じだということです。これは、村の中にすぐく力を持った人と、零細な人という極端な差はなかったということです。

また、村の領域のことですが、ひとつは海側と陸側といった軸が、もうひとつは西と東といった軸が越賀の場合、非常にはっきりと存在します。こちらに行くとか具であり、こちらに行くとか御座があります。そして、御座との境には庚申さんがまつられており（写真1-4）、和具との境にはお墓が存在しています。そして、越賀の中には、岬が突出した場所があり、戦国時代に越賀氏が城を築いた越賀城の跡、城山があります。城山から東の海は東浦、西の海は西浦、東の陸は社田方（さだほう）、西の陸は西方（にしほう）となります（写真1-5）。

お寺は3つありますが、通称が東寺、中寺、西寺となっています。ですから、このように方角をもとにし



写真1-2 宝永四年亥開発という記述（越賀村絵図）



写真1-3 色々な方向を向いている家の描写（越賀村絵図）



写真1-4 御座方面へ向かう道の庚申（越賀村絵図）

た秩序が非常にはっきりしています。

そして、社田方の浜、こちらが西方の浜で、それをわける城山となります。城山は戦国時代には越賀氏の城が築かれていましたが、江戸時代には村の共有の場所となって、郷蔵がつくられました。2つ蔵があって、一方は主に米や海産物を入れる蔵、もう一方は文書蔵で、今日ご紹介した絵図も文書蔵に入っていました(写真1-6)。そして、この場所は近代となって越賀村の役場となります。

次に、この絵図から越賀の信仰を見ていきます。先ほど申した通り、お寺が3つあります。いずれも曹洞宗で鳥羽の常安寺末の寺となります。お寺には、それぞれ「ラント」と記されていますが、これはお墓のことです。一方で「墓所」と書いてある場所もありまして、これもまたお墓となります。両墓制と申しまして、越賀のご先祖様の古い時代のまつり方でして、遺体を埋葬するお墓と、墓碑をたてるお墓、これが別々にあったのです。ラント、ラントウバというのは墓碑をたてる場所です。今は共同の墓地があり、そこでお参りをしているかと思いますが、江戸時代の終わりにはこのような形でした。

それから、お社が非常にたくさんございます。この中で有力だったのは、この八幡宮と山王宮、それから集落の天神さん、この3つです。それ以外には、山の神、えびすさん、浅間さんと色々な神様がいます。これらは、明治の合祀の時にひとつのお宮さんになるということで、山王宮の場所にまとめられたのですが、そこに小学校をつくることになってお宮さんはさらに移転し、八幡宮の場所が越賀神社になったのです。今日の社殿は伊勢神宮の形式ですが、合祀される時に、もともとの形式とはかなり違う、伊勢神宮の形式に倣ったのかもしれませんが。こうして、小さい社は越賀神社に集約されていきますが、庚申さんはそのまま残され

ました。

それから、熊野信仰についてです。越賀には、熊野御師の屋敷があり、ここを拠点にお札を配ってまわったり、熊野観心十界曼陀羅の絵解きをしたりするなどして熊野信仰を広げていました。

あと、富士信仰についてです。つまり、浅間さんのことですが、ここから実際に条件が良ければ富士山が見えると思います。毎年夏には講を作った人たちが富士山にお参りに行くということを、越賀ではやっていました。

また、普門寺には古いお墓がたくさんあります。大蔵寺には、元禄などの年号が刻まれたお墓が築地塀の中に埋め込んであります。これは、安政の地震の時に倒れたお墓、あるいは壊れた瓦を築地塀の中に埋めたものです(写真1-7)。それまであった村の記録を伝えていくということが、安政地震の処理の中で考えられていたことが、この築地塀からわかります。

宝寿院つまり中寺には、地下納屋があり、地下(じげ)つまり村の寄合の場所としても使われていたこともわかります。お寺は村の人々の集まる場所として使われたり、あるいは村の色々な記憶が蓄積されていったりする場だったということです。

村の人たちが使う施設としては、郷蔵、高札場、舞台、井戸などがあります。舞台は絵図の上でははっきりしないのですが、この八幡様の下に舞台が作られ、神様に奉納する芸能がここで行われました。共同で使う井戸が二つ、かんの井戸と大井戸があります。越賀は水が少ない地域であったため、これらは大事な所でした。

安政の地震についての伝承は、2つありまして、1つ目は普門寺の移転です。元あった普門寺は津波で大破し一番高い場所に移った。2つ目は舞台です。八幡宮、神祇の加護で無事であったといわれます。舞台を



写真1-5 郷蔵のある城山と東浦・写真1-6 越賀村郷蔵 文書蔵(右)・写真1-7 大蔵寺の壁に埋められた墓石
西浦(越賀村絵図) 郷蔵(左)

つくったのは村の若者組なのですが、舞台建築の数年後には、舞台と浜の間に土手を作っています。おそらく、それが津波に効いて、舞台が残ることにつながったのではないかと思います。また、「津波流倒記」の碑が大蔵寺にたっており、この石碑も絵図を作った小川三右衛門がたてています。いろんな村のことを紙で伝えていく、あるいは石で伝えていくということを考えていたということがわかります。

それから、伝承も絵図に書かれた地名から見出せます。「タカラノソワ」は宝物が埋まっている崖ということです。それから「ジャンジャン」というのは、深い井戸があってそこにお侍さんたちがお相撲を取って負けると刀を落とされて、ジャンと音がしたという話です。「コボシイワ」というのがいくつかあります。コボシというのはカッパのことをいうようで、カッパが普門寺の和尚さんによくなついて働いていたが、ある時馬とけんかしてカッパの皿の水が流されてしまい、恥ずかしくて越賀には居られないということで出ていくことになり、その時自分が今まで遊んでいた愛着のある石を置いていったといわれています。少し場所が移っていますが、堤防の上にも「コボシイワ」のひとつが今も存在しています。

絵図からわかること、絵図と今の村の様子、地元の方々の記憶、あるいは他の記録を重ねていくと、過去と現在がつながっているということがよくわかります。こういう土地、こういう海のもとで生活を営んでいる。越賀では土地を切って、石を積んで村をつくっていったということです。それから、絵図を作った人たち、過去の人たちは、後の人たちに村の姿を伝えていきたいという意思がはっきりしている。絵図をつくったり、築地塀にお墓を埋め込んだり、石碑をたてたりして伝えていく。過去の人がこれから先の人たちに伝えようとする、先の人は未来の人ということになりますので、過去・現在・未来がつながっているということです。越賀には海があって、土地があるといった変わらないものがある、それによって越賀の村のモノ、空間としての連続性が保たれている、そのような変わらないものがあるからこそ、ここでは、過去・現在・未来がつながっているのだと実感しています。

「先志摩海女が迎えた近代～朝鮮出漁と漁業専門化～」

塚本 明（三重大学）

三重大学人文学部の塚本と申します。私の専門は歴史学でして、特に江戸時代を中心とした歴史を大学では教えております。私自身は三河の安城の生まれで、信州松本で中学・高校時代を送り、京都で歴史の勉強をしてから20年程前に三重に来ました。海のない所で暮らしてきましたので、海への限らないあこがれがありました。

三重に来て間もない頃、三重県の歴史を研究している大先輩に連れられてきたのが、越賀の郷蔵でした。その時は越賀の長老である谷口治右衛門先生がお元気でして、治右衛門先生のご案内で郷蔵の中を見せていただいたことを覚えております。郷蔵の文書蔵には古文書がぎっしり詰まっていますが、日清戦争のさなかに越賀の海女が朝鮮まで出かけて行って潜っていたという記録が残っており、それを見せていただいてびっくり仰天したのです。日本でこんな所があったのかと思い、日本の歴史の多様性というのをあらためて感じた場所でした。その時、とても衝撃を受けたものの、その後しばらくご無沙汰しておりましたが、6、7年前から海女文化振興の仕事を担当する中で、あらためて越賀の郷蔵に参ったわけです。越賀の郷蔵文書は志摩地域でも屈指の文書群ですが、とりわけ海女さんを語る上でかけがえのない貴重な資料であるからなのです。

鳥羽・志摩の海女さんは、ご承知の通りこのたびめでたく国の重要無形民俗文化財に指定されました。文化財といいますと、ともすれば芸術家の作品であるとか、あるいは無形民俗文化財でも著名な祭礼や行事などが中心なのですが、海女というのは普通の女性の生業、普段の仕事なのです。この地域に特有の生業が文化財として高く評価された、ここに変変大きな意義があるのです。ただ、私たちはこれで満足してはおりません。さらに世界無形文化遺産を目指して、活動を続けております。実は、韓国済州島の海女さんが先に世界無形文化遺産になっています。しかし鳥羽・志摩の海女漁は、韓国に勝るとも劣らぬ非常に質の高い文化を持っております。

ただ、今後この問題に取り組んでいく上で、大きな課題があります。地元の方はよくご存じのことですが、海女さんはどんどん減っております。特に志

摩の方の減り方が深刻で、それを何とかしたいと思っているのです。そのためにどうしたら良いかというと、漁業として、産業としてだけではなくて、文化の面でも観光の面でも、様々な分野からこの問題を考えていく必要があります。そういう意識を持って、お話をさせていただこうと思います。

さて、先ほど菅原先生から詳細に解説がありましたが、越賀の村絵図のお話からはじめます。まず、これは非常に質の高い村絵図です。私も仕事柄、村絵図を結構見ておりますが、これだけ詳細でみごとな絵図というのは、そうそうないだろうと思います。特に藻場とか磯場とか、海に関する記載が丁寧で詳細なのです。海女漁を意識して描かれているということは間違いないでしょう。

志摩半島の浦村は、昔から海女さんの活動が非常に盛んな場所でした。石川、山口、福井とか、日本列島の各地に海女さんがいますが、ひとつの集落だけで特権的に海女漁をやっている所が多いのです。それに対して鳥羽・志摩では、海に面した集落ごとに海女さんがいるのです。

日本の中で鳥羽・志摩あるいは先志摩の海女さんの特質は何かと考えた場合、結論を先に申し上げますと、幅の広さと多様さだと思います。どういうことかと申しますと、ひとつには、活動範囲が広いということ、もうひとつは生業形態、働き方の多様さです。海女漁以外にも色々な仕事をしているということにも特徴があるわけです。

今回、海女漁に関わる古文書を展示しております(写真2-1)。私どもは普段、こういった資料を見ながら研究をしております。しかし、古文書をお見せる

だけでは、なかなか皆さんに注目してもらえません。この中に何が書いてあるかといいますと、季節ごとに海女さんを含む漁民たちがどのような生業を営んでいるか、どんな漁をしているのかという内容です。こういった資料が、鳥羽・志摩の漁村にはあちこちにあります。それらの資料を集約すると、春夏秋冬季節ごとの仕事内容の把握が出来ます(図2-1)。春先にはワカメやヒジキやノリを採り、夏から秋にかけてはアワビやサザエを獲り、冬には山仕事、柴刈をします。ここで注目したいのは、まず海女さんといいますとアワビやサザエを獲るというイメージがありますが、歴史的に見ると海藻を採る比重が非常に高い。そして冬には山仕事をするという様に、色々な仕事をしているというのが重要な特徴なのです。季節ごとに様々なものを採って、多様な生業を営む、それが漁村における海女さんたちの働き方なのです。

海藻の中で、代表的なものが天草です。なお、越賀郷蔵は2つありまして、絵図や文書を納めた文書蔵と、年貢米や海藻などが入れられていた蔵があります(写真2-2)。2つ目の蔵の方に、天草も入れられていたのだと思われます。さて、天草について記された古文書を見て、私はびっくりしました(「天草積送目録」など)。この資料には越賀村の天草取引の実態が記されているのですが、その規模がすごいのです。越賀村では年間6〜7回、1回で最大1000俵ほど、計6000俵もの天草を出荷していました。1000俵は約25トンになりますが、これだけの量を1回で、そして年間では150トンを取引したのです。現在、日本全国で年間500トン弱、三重県では十数トンの天草の取引が行われているのですが、三重県の年間取引量の10倍以上の量を、越



写真2-1 古文書の展示
(志摩市歴史民俗資料館)



図2-1 志摩の漁村の春夏秋冬の仕事

賀村だけで扱っていたわけです。現在天草の値段は、1俵2～6万です。仮に5万円で換算しますと、実に3億円となります。そのくらいの額を1つの村の海女さんたちの働きで稼いでいたのです。

次に、海女さんの山仕事を見てみましょう。越賀の資料ではなく鳥羽の元浦の資料なのですが、鳥羽・志摩の漁村の資料を見てみると、「海山一円」という言葉がよく出てきます。漁業と林業は一体のものである、という認識なのです。海女漁との関わりで申しますと、山と海は海女さんの焚き火でつながっております。長時間海に入っていると、夏でも体が冷えます。海女漁を行うには、海に入る前と後に火で体を温めることが必須条件です。現在は海女小屋で火にあたりますが、昔は浜で薪を焚いて体を温めていました。そのために薪が大量に必要だったのです。山仕事に行くと薪を確保し、そして余った分は伊勢に出荷したりもしております。

次に、展示品のひとつ、竹籠をとりあげます。一見ありきたりの竹籠に見えますが、文化的には貴重なものなのです。越賀郷蔵文書の中に、大正年間にはこういう竹籠を編むという産業が、越賀村では重要な副業として成り立っていたことを伝える資料がありました（「農工商第二種」・写真2-3）。間違いなく、海女さんたちもこれに関わっていたと思われます。この竹籠はアワビを入れる籠としても使われ、また志摩だけではなく尾鷲などにも出荷されています。

志摩の海女文化と伊勢神宮とを結ぶ大事なものに、熨斗鮑があります。江戸時代には贈答品として欠かせないものでした。現在、私たちが用いる熨斗袋の飾りの部分に、わずかに形式をとどめております。熨斗鮑

は神宮の御師たちの土産物として珍重され、参宮文化の中で非常に大きな需要がありました。熨斗鮑は、現在では鳥羽市国崎町にある神宮御料鮑調製所という所で、長老たちにより厳かにつくられています。しかし江戸時代の浮世絵を見ますと、女性たちが熨斗鮑をつくっている図が描かれていますし、古文書にもそのような様子が出てまいります。つまり江戸時代の海女さんたちは、アワビを獲るだけではなく、アワビを加工して熨斗鮑をつくり、売る所まで自分たちでやっていたのです。

次に、越賀村の農業についてお話しします。このプロジェクトを開始した時に、先志摩にはもう田んぼがないよな、ということが話題になりました。しかし古文書を見てみると田んぼはたくさんあったはずで、現在とのギャップを感じてしまいます。越賀の文書蔵には年貢免状というものが多数残っております。納めるべき年貢の量を指示する鳥羽藩からの割付状なのですが、例えば延宝8年（1680）の年貢免状を見ますと（写真2-4）、高470石と記されています。越賀村では470石（約1200俵）の米が取れるという前提で、年貢が割り付けられたのです。田んぼが27町（約27ha）、畑は10町（約10ha）あるということも、記されています。なお、先志摩全体では2100石ぐらいの米が取れるということになっています。越賀は農村的で和具は漁村的だなどと聞くのですが、先志摩全体で農業も盛んだったのです。では、その470石の米が取れた田んぼはどこへいつってしまったのか、それがこの3年間、私の課題の一つでした。

村絵図を見ますと、集落の後ろの方の山地に田畑が広がっています。黄色く塗られた所が畑で、緑色が田



写真2-2 文書蔵内部の様子（志摩市越賀）



写真2-3 農工商第二種

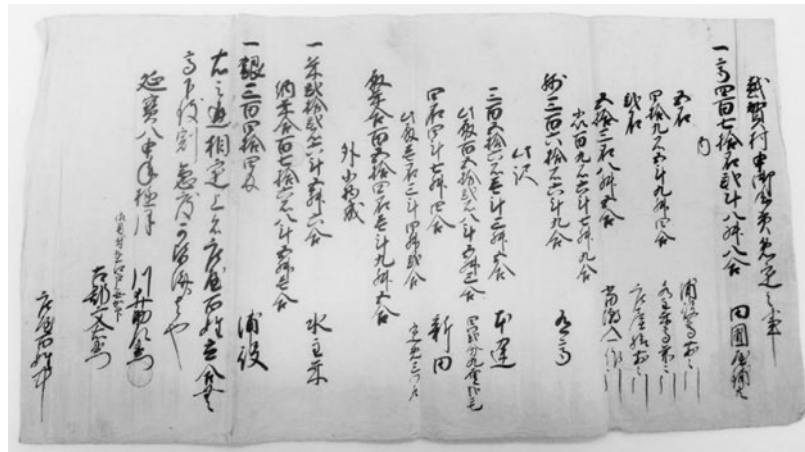


写真2-4 延宝8年（1680）越賀村年貢免状

んぼです。これを見ると、なるほど470石の米が取れると思うわけです。これを誰が耕していたか。もちろん男手もあったでしょうが、女性、海女さんの方が農作業に入りやすいのです。男は船に乗って一日中漁に出ますが、海女さんの方は2時間、3時間ほどの仕事です。一日中潜っているわけではない。また、男の漁は少しぐらいの波ならば船で漁に出ます。海女さんは少し荒れたら海に入れません。危ないというのがありますが、少しでも荒れたら海が濁ります。江戸時代には磯眼鏡がありませんので、今以上に海女漁が可能な日は限られていたと思われます。海に入れない日には農作業など他の仕事をしていたことでしょう。江戸時代の漁村の女性たちの働きというのは、小規模で多様な生業、その有機的な組み合わせで成り立っていたのだと思います。

そういった構造が、近代以降、特に戦後に大きく変化し、田んぼがどんどん減っていきました（北村報告参照）。しかし、もともと志摩地域はこの様に木々で覆われた低山地帯であったわけで、江戸時代早くからこの土地の人たちが汗水流して農地を広げていった、それが近代以降にまた元に戻ってしまった、ということです。そして農地が減少する出発点は、私は戦後ではなくもう少し早かったのではないかと考えています。その原因は、海女さんたちの出稼ぎであったと思うのです。

海女さんたちの出稼ぎ自体は、江戸時代からありました。上磯稼ぎ、下磯稼ぎという言葉がありますが、上磯稼ぎとは伊豆や房総半島へ行くこと、下磯稼ぎとは、田曾浦から木本（熊野市）あたりまでの熊野灘沿岸に行くことを指しました。ただし、この段階の出稼

ぎというのは、地元ではあまり漁に出ない人たち、技術が未熟な海女さんたちが修業に行くための出稼ぎであり、つまり自分の村での海女漁と両立するような出稼ぎでした。ところが明治以降になると、一気に規模が拡大し、村を挙げて出稼ぎに行くような村も出てきます。北海道の利尻島、礼文島から全国各地へ、そして朝鮮半島にまで潜りに行くようにもなります。その背景には、寒天に加工する天草の需要が、中国で爆発的に増えたことがありました。日本の国策として天草は重要な輸出品となり、生産が奨励されます。明治20年代以降、国の政策として海女さんたちを含む漁民はどんどん朝鮮半島へ進出していきます。西日本を中心とした男の海士たちによる漁や、潜水具を使う漁も盛んでした。ただし、裸の素潜り漁は、もっぱら鳥羽・志摩の海女さんたちが行っていました。

出稼ぎに赴く先は、江戸時代には地域的に限られていましたが、明治期になると一気に広域化します（図2-2）。出稼ぎ先までどのように行ったかということ

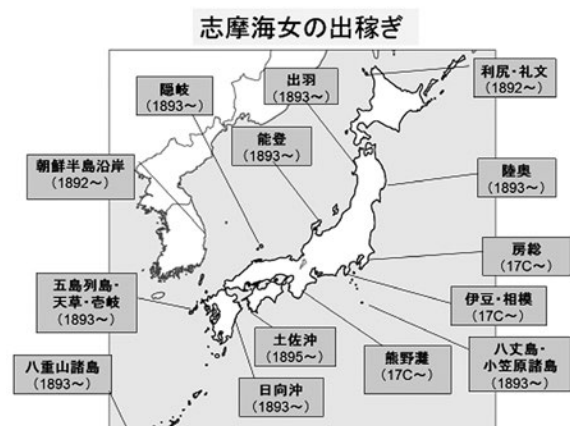


図2-2 海女の出稼ぎ先

にも触れておきましょう。越賀郷蔵の古文書を見て驚いたことですが、海女さんたち志摩の漁民は、自分たちで舟を仕立てて朝鮮半島まで行っているのです。志摩を出て瀬戸内海を通り、玄界灘を越え、済州島から釜山、元山まで行っておりました。

なぜわざわざ朝鮮まで潜りに行ったかといいますと、何より朝鮮海には漁業資源が非常に豊富だったのです。朝鮮半島と日本との魚食文化の違いにより、未利用資源という形で豊かな漁業資源があったのだろーと思えます。だから、魚介がたくさん獲れました。出稼ぎの規模はどんどん拡大します。そうすると、自分たちで舟を仕立てるのではなくて、福岡、長崎、大分などの九州の商人や大阪の商人たちに雇われて、出かけるようになります。こういった商人たちが、わざわざ志摩まで海女をスカウトに来て雇っていくのです。出稼ぎ期間も長くなり、2年間、3年間という単位で行った切りになります。出稼ぎ地では、船の上で生活していたようです。

朝鮮海での漁の様子を見てみましょう。明治41年（1908）の史料によれば、1人1日で5〜20貫目のアワビが獲れたとあります。20貫目は75キロですが、アワビ1つ200グラムとすると、およそ400個となります。現在の鳥羽志摩の海女漁では、1日でアワビ1〜2個獲れたら良い方ということもあるようですが、この時期の朝鮮海ではこれだけ獲れたわけです。ところが海女さんたちは雇われた立場となっていますので、雇った商人がアワビを買い上げるのですが、その額は1貫目にわずか8銭でした。非常に安いので、雇った商人たちは莫大な利益を得たはずですが、しかし海女さんたちも、1個あたりの利益は小さいですが、とにかくたくさん獲れるものですから、全体としては大きな収益があったわけです。ですので、海女さんたちも挙って朝鮮海へ行ったのです。

この出稼ぎは、先志摩に何をもたらしたのでしょうか。大正8年（1919）の史料によれば（「農工商第二種」）、もともと越賀村は農業が生活の基盤で、漁業は副業の村であったが、大正年間に漁業専門業者が増加し、漁業に熱狂する者が多くなる一方、農業には冷淡になった、その背景には水産物の高騰があった、とあります。統計データから見ると、この頃に農業収益は1人年間約12円でした。それに対して韓国に出漁した海女さんたちは、数か月で数十円から百円を稼いだのです。

この時期には村内の女性人口が急増しており、男女の人口比が極めてアンバランスになっていました。その原因は、よそから若い女子を養子に取ってきて海女にしたということがあったと考えられます。漁業専門業者の増加という現象は、主に海女さんたちの専門化であったらしいのです。江戸時代の浦村の女性たちには、色々な営みがあり、その中のひとつが、漁業、海女漁でした。しかし、朝鮮出漁により海女さんが専門化してしまう。女性が漁業専門業者となっていくことで、農地が荒廃し、竹細工などの加工業も衰退していきます。生産が大規模化するとともに単純化してしまうという、現在にも見られる構造です。

一方、豊かな朝鮮海の漁場も、乱獲によって衰退してしまいます。出稼ぎ漁には、資源管理的な発想はありません。自分たちの海ではないからです。資源管理的な漁のあり方、持続可能な、循環的な営みの発想というものが、海女漁の大事な本質です。ところが出稼ぎ漁というのは、基本的に取り放題に取ってしまい、取り尽くせば次の海に行くのです。ですから乱獲になるのは必然です。厳しい言い方をすれば、朝鮮海への出稼ぎで行われた海女漁は本来の海女文化ではない、ということです。結局、アワビを取り尽くして、海女さんたちは志摩に戻ります。

しかし、戻った時に故郷の田畑は、出稼ぎの結果、荒れ果ててしまっています。そして、元のような田畑も、様々な生業をもとにした日々の営みも、簡単には戻りません。田畑は切り開くのが大変で、そして簡単に荒廃します。これが、志摩の田畑がなくなる起点となったのではないかと思います。

こういう話をしますと、昔は良かったが今はダメになったのだと受け止められるかもしれませんが、歴史学というのはそのような単純な学問ではありません。しかし、海女漁を今後どう残していくか、どのように発展させていくか、そういうことを考えるひとつのヒントがここにあると考えています。もともと海女漁は専門の職業ではなく、自然の中での色々な働き方、生業の組み合わせのひとつだったのです。海女漁に加え、農業とか山仕事とか加工業とか、様々な仕事との組み合わせで、漁村に生きる女性のなりわいが成り立っていたのだ、と理解したら良いと思っています。

もうひとつ、先志摩の海女さんたちというのは、非常にグローバルな活動をしていました。本日は触れま

せんでしたが、片田村には明治中期頃に活躍した、伊藤りきという有名な女性がいます。りきはアメリカにわたって結婚して、それがきっかけになって片田の人たちがたくさんアメリカにわたり、片田がアメリカ村とよばれたことがありました。当時、普通の村でこれほどグローバルな活躍をした女性はいなかったのではないかと思います。非常に先進的な、たくましい先取の精神性を持った人々でした。

こうしたことが、先志摩の将来を考えていく上で、大変大きな資産になるのではないかと思います。



参考 当日の会場、及び志摩市歴史民俗資料館での解説の様子

「空から見た先志摩～海と陸のなりわい～」

北村淳一（三重県総合博物館）

この写真（写真3-1）は最近、志摩市志摩町越賀で撮った写真で、熊野灘に面した美しい町並みと海が印象的です。特に鳥のトビが写ったというのが特徴的で、今回の移動展示のポスターでも使っています。

今回の調査地である先志摩という場所ですが、三重県の志摩市の先志摩半島、旧志摩町の土地と定義させていただきます。

本企画展示でもありますように、13万年前は御座岬と金毘羅山だけが海から出ていてあとの部分は海に沈んでいたという状況でした。温暖化して海水面が上昇すると、全部海になってしまう場所でした。今回、私と名古屋大学の安福大統さんは過去から現在にかけて土地利用の変化を把握し分析し、色々な統計資料から経済的な変化を把握して、先志摩にどんなことがおこってきたかを研究しました。この研究は、安福大統さんたちが「漁村地域の土地管理に着目した就業・生活形態の変化による土地利用への影響に関する研究—三重県志摩市前志摩半島を対象として—」という論文にまとめられておりますが、この成果をもとに発表します。特に先志摩の中でも志摩町越賀がどういう風に土地の利用が変わっていったかということを主に紹介させていただきます。安政2年（1855）頃作成の越賀村絵図と、昭和43年（1968）の航空写真とを比べてみます。昭和の航空写真では田んぼをオレンジ色に、畑を黄色、宅地をピンク、緑を森という風に色分けして分析しますと、田んぼと畑が昭和にもあったことがわかります。越賀村絵図の安政頃とそんなに土地利用は変わらないことがわかります。田畑も多く、集落の南側に生業の場が集中していることがわかります。一方、昭和50年（1975）頃になってくると、安政の越賀村絵図と比べると一部の田畑が草地になっている、谷筋の水田が使われなくなってきた傾向があります。昭和43年（1968）と比べても畑がやはり少なくなってきました。また、宅地が漁港からどんどん分散している、漁港から離れていっている、集中から分散へという方向になってきていることがわかります。

平成23年（2011）の最近の航空写真では、道路が開通しまして、田んぼが全くなくなったことがわかります。田んぼは一切ありません。畑は散らばってしまい、宅地がだいぶ高台の方に移転していることがわかるか

と思います。このように、土地利用が劇的に変わってきていることが地図から読み取れます。特に、田んぼだった所が放棄されて草地になっていることが傾向としてわかります。

志摩町越賀の土地利用の一連の流れを航空写真から見ると、絵図ではこうだったのが、徐々に写真から見ても緑の森が発達していることがわかるかと思います。谷筋に畑としてあった土地が、1970年代には航空写真にくっきり出ていたのに、どんどん森になっているのが現在の写真と比較するとよくわかります。

色分けして図示しますとさらによくわかるのですが、田んぼがないのが明確で、畑がなくなってきて、どんどん森になっていることになります。あと、宅地が広がっていることになります。

では、この変化がどういう要因でなってきたのかを分析してみます。先志摩の時代別の就業と人口の変化を踏まえ地域の状況を分析し、そこから土地利用の変化の要因を読み取ることになります。大きくいいますと社会的変化による、1940年代から就業や生活の形態の転換があります。また、昭和47年（1972）から平成5年（1993）のあたりでも大きく転換していき、真珠養殖業の衰退から観光業への転換、そして、漁業の衰退から人口転出の増加があります。

最初の転換期は大正9年（1920）から昭和47年（1972）までが該当しますが、海女漁や真珠養殖業の多さがあ

ります。つまり、海女さんや漁師さんをはじめとする第1次就業者が非常に多く、サービス業、観光業などの第二次就業者はそんなに多くないことがわかります。そして、真珠いかだの数や漁業者の数、真珠の生産量も非常に高いことがわかります。いわゆる、半農半漁による自然資源を用いた生活が確立していて、家族単位で自給自足していた。そして、就業と資源管理が直結していて、土地管理活動も行われていた。地域内で就業とか生活とかが、すべてその地域の中で完結、極端なことをいうと志摩町越賀の村の中で完結していた時代です。

次の転換期は、徐々に畑とか田んぼとかがなくなってきた時代、つまり観光業への転換の時代となります。合わせて同時期には、安価な海外製品の輸入による真珠養殖の衰退があり漁業者が減ってきている傾向があります。この時期には、観光客数や宿泊客数が非常に多くなっているのがわかります。観光業などの、第二次就業者が増えてきていることです。それらの流れがあった上で、また道路が整備され車が普及し、人口が流入し生活の利便性は向上したわけです。ところが、観光業に移行して、経済外部性が高まり、田んぼや畑の自然資源の利用頻度が低下したことによって地域内での自然資源利用が低下し、地域内で循環していた経済活動が衰退してきたことになります。

最後の転換期ですが、平成5年（1993）から現在に



写真3-1 空から見た越賀

至るまでの漁業者の減少、市街地への人口流出の時代となります。バブル崩壊とともに観光業が衰退し、合わせて同時期に漁業資源や漁獲物の単価の低下による漁業就業者の減少もあり、地域内での就業確保が困難になり人口の流出が発生し、耕地の管理放棄の増加など自然資源利用の低下、地域内での経済活動の低下があり現在に至る形になっていることです。

志摩町越賀に注目していましたが、先志摩全体では、就業形態や土地利用について同じ傾向であると思います。もともと広がっていた畑や田んぼが放棄され、草が急激に増えてきております。しかし、1920年から1972年までの年代は、森は増えていません。志摩町布施田の航空写真を見ても、田がいっぱいあった部分が、今では宅地になっている所もあります。宅地の分散も見られることになります。また宅地が漁港周辺に密集する形から、分散する状況になっていることもわかります。

また、昭和50年（1975）から平成23年（2011）になりますと草が森林になっています。森林の面積がどんどん増えてきています。宅地自体も増えてきていることで、これまで農業で土地を利用していたのですが、土地が人の住む家、宅地に移り変わっていくことが現象として起きていることになります。また、かつての田んぼが宅地になっていることもわかります。

土地利用の変化と地形条件ことですが、0～6m、7～14m、14～23mに標高を区切り各年代ごとに分析しました。これを見ますと、宅地は、標高が高い所で増え、標高が低い所で減少傾向にあることがわかります。高台に宅地が増加、分散しており、津波への対策だろうと思われます。漁港周辺は空き家が増加して土地が空洞化していることがわかります。あと土地の傾斜ですが、傾斜が急な所は農地としても利用にくいことで、傾斜が急な所は農地が減ってきていることがわかります。志摩町和具の航空写真を見ても、漁港周辺から、高台への宅地の移転が確認できます。

まとめとしては、就業形態が、漁村地域で変わってきた。そこでは、自然資源と密接に関わった生活があったのが、近代以降の農山漁村の就業生活形態の変化、生活の利便性や交通の発達による外部経済への依存度の高まりなどで、結果として田畑が減少し津波への防災のために宅地が高台へ移転するといった、土地利用変化があったといえます。昔ならば、海の資源を得る

ために近くに住んで、徒歩で通っていたわけですが、今では車でさっと行くことが可能なので、高台に人が住むことになります。防災への地域の人の意識も非常に高まったのもあるのでしょう。

土地利用が自然環境に及ぼす影響についても、最後に触れさせていただきます。田んぼが減った、田んぼがないのもこの地域の土地利用の大きな特徴です。湿地といった自然環境がないことになります。乾燥していますので、じめじめした所に住む生物、例えばカエルなどが減った、昆虫などが減ったことを実感としてあるのではないのでしょうか。以前、昆虫展を志摩市歴史民俗資料館が行った際に資料館がそのような感想を聞いたようです。土地利用が変わるとともに自然環境も変わってきていることが受け止められるかなと思います。

「先志摩のくらしに魅せられて」

門口実代（三重県総合博物館）

三重県総合博物館の門口と申します。私は、民俗の担当をしておりまして、県内各地に出かけて、その地域で営まれてきたくらしについて地元の方に色々とお話を聞かせていただくことで、調査をしています。こちら志摩の方には平成23年（2011）度から、和具を中心に通わせていただいています。三重県総合博物館は平成26年（2014）春に新しく開館いたしましたが、和具で色々教えていただいたことをもとに、志摩のコーナーの展示を造らせていただきました。私は三重県の出身ではありませんので、初めて志摩に来たのも博物館の開館準備の仕事をするようになってからで、まだ日は浅いのですが、こちらを訪れるたびに皆様にあたたく迎えていただきまして、その魅力を感じている所ですし、そのようにして、受け入れていただくことは大変ありがたいことだと思っています。

本日は、博物館のことをごく簡単にご紹介しました後に、私のような外の人間から見た、志摩の民俗の魅力について、結婚式を例にお話をさせていただきたいと思います。

まず、三重県総合博物館ですが、津駅近くの県の総合文化センターの向かい側にございます。この中に、常設の展示室、基本展示室とよんでいる部屋がございしますが、こちらでは初めて三重に来た人でも三重の自然や歴史・文化について、その良さをわかっていただけるように一体的に紹介をしています。この中で、人のくらしにつきましても、農村であったり、山村であったり、色々な場所で営まれているくらしを紹介しています。海辺のくらしにつきましては、伊勢湾の自然と熊野灘の自然の展示に囲まれたコーナーで主に和具のくらしのを見ていただいております（写真4-1）。このように、和具の景観を背景に、そこで暮らす方々

のインタビューの映像であったり、海女さんの道具であったり、食べ物のこととか多くのことを、限られた空間ではありますが、見た方がこの場所を訪ねてみたいなどと思っていただければと考えて展示を造っております。

この展示を造るにあたって調査をさせていただいたのですが、具体的には海女漁やエビ網漁の調査では、海女さんや漁師さんの漁に同行させていただいたり、作業を拝見させていただいたりしました。また、地域の方々にお時間をいただいて、お話を聞かせていただくということ、民俗学という聞き取り調査をさせていただく中で、私自身学んでおります。実際、人のくらしというものは本に書き記されているわけではなく、何か文献を見ればわかるというわけでもありません。また、先志摩には特色あるお祭りであるとか、年間を通した行事が色々と伝承されております。こちらの潮かけ祭りには（写真4-2）、毎年夏に行かせていただいておりますが、その都度新たな発見があります。正月元旦にも和具を訪ね、この地域は漁村の信仰が今でも息づいている場所であると感じました。また、おいしい食材（写真4-3）と郷土料理については、志摩の大きな魅力の一つではないかなと思っています。

このように、地元の出身ではない私から見た志摩のくらしというものは、非常に魅力的です。しかし、もしかしたら地元の方にとっては、それはごく当たり前のことであって、なかなかその魅力に気付かれにくいということがあるかもしれません。本日は、志摩の魅力につきまして、結婚に関して、和具の方はシュウトヤガヨイをされるという話を聞いておるわけですが、全国的に見た時の志摩の民俗の特色について、県内の調査でわかってきたことを中心にご紹介したいと思います。

和具では婚礼の話がまとまりますと、タルイレとい



写真4-1 展示風景
（三重県総合博物館）



写真4-2 潮かけ祭り



写真4-3 お造り

う儀式がまず行われるそうです。親戚の女性、おばさんであるとか、お姉さんであるとかそういった方々が、青竹を二人で担いで樽にお酒を入れたものを入れて、そこに鯛を一對つけて、花嫁さんの家へ運ぶということです。樽には九合九勺の清酒を入れておいて、持っていった先の花嫁さんのお宅で一勺たして一升にして、すなわち“一生一緒に”ということで縁起を担いだと聞いております。そして、その時にご馳走を並べて、近所や親戚の人をよんで披露をしたそうです。

この後、シュウトヤガヨイがはじまります。一定の期間、2年や3年の間、それぐらいの間、すぐに同居をするわけではなく、男性の方が毎晩女性の家に通うということが続けられるそうです。そして、ある段階に達した所で結婚式を挙げて、その後同居がはじまると聞いております。シュウトヤガヨイの経験をされた方は、ある一定の年代より上の方で、今行われている習わしではないですが、この地域ではよく知られていることかと思います。嫁入り道具につきましても、民謡に「志摩の娘ら長持ちゃいらん、ノミとサワラの桶一つ」とうたわれているようで、箆笥や長持などを持ってくるわけではなく、海女さんであれば海女漁に使う道具と、身の回りの道具や寝具などのみを持ってきて嫁入りするというのが一般的だったようです。今ではホテル、少し昔では旅館で結婚式を挙げられる方が多かったと思うのですが、かつては家に近所の方や親戚の方を多く招き、そこで盛大な宴が繰り広げられたということを知っています。多い時は200人ぐらいの人が集まったというお話も聞いております。ここでは、料理番といわれる方を中心に手作りの海の幸を使ったような料理の数々が並びますが、陶器で出来た大きなお皿、一人一人の前には朱塗りのお膳に豪勢な料理が並んだようです（写真4-4）。

このシュウトヤガヨイについて、もう少し詳しく見



写真4-4 婚礼用の膳椀

ていきたいと思います。シュウトヤガヨイは、先ほどのタルイレが終わるとはじまるものなのですが、地域ではシュウトヤガヨイ、あるいはカヨイといわれるそうです。タルイレが終わりますと、その日の晩に旦那さんの方が寝具を女性の家に運んで、それ以降は一日の仕事が終わると、男性は夕飯を取ってから女性の家に泊まりに帰ったそうです。朝ご飯については、場合によっては女性の家で食べられる方もいらっしゃるそうですし、自分の家に帰って食べてそれから仕事に行った方もいらっしゃるそうです。その期間についても人によって様々で、おおむね2〜3年ぐらいが多い印象ですが、子どもが生まれるまで、あるいは子どもが生まれてしばらくして、長い方ですと5〜6年といった方もいらっしゃいました。このような習慣は、海女さんや漁師さんなど海の仕事に関わる方に多いように思いますが、そうではない会社勤めの方でも通ったとおっしゃっている方もいらっしゃいました。

なぜこのように通うかという理由については、海女さんである娘が稼ぎ頭なので実家がすぐに手放したくない。同居をはじめても、上の世代の人が家にいて家のスペースがあげにくいといったことなど色々いわれております。シュウトヤガヨイという表現は和具では一般的に使われていて、鍋島医院の鍋島泰先生がまとめられた『和具の方言』という本の中でもとりあげられています。ただ、シュウトヤガヨイという表現が、近隣の地域でどこまで使われているのかについては、今後調べないといけないと思っております。

シュウトヤガヨイについてまとめます。タルイレがありますと婚姻が成立し、社会的には結婚したということが認められるわけですが、その後の期間にシュウトヤガヨイが行われます。ある期間が過ぎた所で結婚式が挙げられ、それから同居がはじまります。こうした習慣については、実は民俗学の中では、古くから着目されてきた所でありまして、私も三重県に来る前から文献で読んで志摩のシュウトヤガヨイについては勉強しておりました。柳田国男は民俗学の創始者として知られておりますが、柳田は歴史的に見ると婿入り、旦那さんがお嫁さんの所に入り、そこで披露の儀式があるという形の婚礼から、嫁入りの儀礼をもってはじまる婚礼へ移り変わってきたといっております。この志摩のシュウトヤガヨイは、婿入りの儀礼をもってはじまる婚姻と考えられると思います。他の研究者の方

も志摩町の和具をとりあげて、こちらのような「婿入婚」の事例として文献の中で紹介もしておりますし、『むらの家族』という本でも和具の家族についてかなり詳細な調査をされておりまして、シュウトヤガヨイを基本とするこの地域での家族関係を分析したり、和具の離婚についてシュウトヤガヨイとの関連から論じたりされているのが興味深いです。これまでの研究では、妻問婚の地域では離婚が少ないと考えられていたようですが、実際に調査をしてみるとそんなことはなくて、和具の地域は他の地域と比べると離婚率が高いということがわかったようです。あわせて、シュウトヤガヨイの期間に別れる夫婦は100組に2組というぐらいでそれほど多くないということが示されています。こちらの習慣について少し視野を広げて、三重県内全体で見た時にどうかということですが、シュウトヤガヨイのような通い婚の報告は、志摩町和具、越賀、片田であります。布施田なども記述がないだけで、もしかするとあったのではないかと考えております。あと、磯部、大王、浜島、鳥羽であるのと、あと度会町などの山間部でも一部の地域では通い婚が行われていたようです。少し離れた地域では、伊賀の方でも一定の期間旦那さんが通ったという報告がありまして、こちらの場合は結婚して子どもが出来て結婚が成立すると考えられているようで、少し志摩とは事情が違うのかなと思います。さらに全国的に見ていきますと、三重県内では志摩、伊賀、津市の香良洲町と4箇所が挙げられていますが、県外については海女さんの多い地域でもある石川県の舳倉島や瀬戸内海の島々、奄美大島から沖縄にかけての島々に分布しております。

このデータは、1978年に日本全国の民俗の様子がどうなっているかがわかるように、各都道府県で30箇所ぐらいの地点を決めて、同じテーマで一斉調査を行ったものです。全国で1400地点ぐらい調査地点があります。そのような中で、シュウトヤガヨイのような形式で把握されているのはこれだけしかないということで、非常に特色のある習慣と考えられるのではないかと思います。

この様に、今日はシュウトヤガヨイを例にお話をさせていただきましたが、このように地域の方にとってはごくごく当たり前のことが、実は当たり前ではないということ、それが先志摩ならではの特色であり、また魅力につながっているのではないかと思います。も

ろん、われわれは地域に伺って、その地域の方に教えていただくことが基本となります。それに加えて、地域外の私たちだからわかるというものもあると思います。それが、大学や博物館の役割であると考えております。

今後も志摩に通わせていただきたいと思いますのですが、少し広い視野から見るということも合わせて行う必要があります。和具についても、まだまだわからないことばかりで、ましてや志摩の他の地域については本当にこれからという所です。ぜひ、今後とも色々教えていただきたいと存じます。また、婚礼の写真を紹介しておりますが、こうした記録も博物館で保管をして後世に伝えていきたいと思いますので、お手元にありましたらご一報いただけましたら幸いです。

『『小さな小さな海の国』の民俗資料、国の登録有形民俗文化財に登録—くれるものはすべてもらう、これが収集に対する基本姿勢であった—』

崎川由美子（志摩市歴史民俗資料館）

志摩市歴史民俗資料館で館長をさせていただいております崎川と申します。平成28年（2016）3月三重県では初の国の登録有形民俗文化財として、当館所蔵の民俗資料の内、3,828点（生産用具3,701点、関連資料127点）が「志摩半島の生産用具及び関連資料」として登録されました。国の登録有形民俗文化財とは、保存と活用が特に必要とされる有形の民俗文化財で、登録の対象は原則として近代以降に普及したものであり、生活用品、工業製品などの生活文化財など、系統的、網羅的に収集されたコレクションで地域的特色、技術的特色等を示すものとされておりまして、私たちの身近にある道具ばかりですが、道具の一つ一つから先人の知恵や志摩の生業の歴史を知ることが出来ます。登録された生産用具とは、漁業、農業、山仕事、養蚕、養蜂、植木の道具などを指しています。また登録された関連資料とは、賢島にあった旧国立真珠研究所の閉鎖にともなって昭和58年（1983）に旧阿児町が譲り受けたもので、明治40年（1907）頃に使用されていた真珠の核入れの道具なども含まれております。このような資料について、次のような評価が登録時にされました。すなわち、昭和55年（1980）の志摩民俗資料館の開館に向けて日本観光文化研究所が志摩半島全体から収集した資料を母体とし、志摩市を構成する旧町浜島町、大王町、志摩町、阿児町、磯部町が収集した資料を加え一つの資料群として分類整理したもので半島全体の生活を伝える資料群となっています。特に漁具が充実

しており、真珠養殖などこの地域の生産の特色を示す資料といえます。周囲を海に囲まれた我が国の生業の変遷や地域差を考える上で注目されるというものです。

この様な評価に加えて、資料群をながめてみると、職人の道具も充実しておりまして、漁業や農業などの産業を職人の高い技術で支えていたことがよくわかります。海女漁の道具については、昭和初期頃から30年代にかけて使われていた海女さんの道具が代表的です（写真5-1）。そして、漁労の道具（写真5-2）、鍛冶屋の道具、瓦製造、石工、船大工などの道具が入っています。また、稲作と畑作、養蚕の道具もあります。養蚕は主に農業と漁業の副業として行われており、特に磯部地区が一番多く、唯一の現金収入として生活を支えました。これらの資料は、廃校となった小学校を収蔵庫として整理して使っております。再分類された資料が各教室に収蔵されています。

先ほど登録された理由に出てきました、志摩民俗資料館について説明させていただきます。今でも記憶にある方も見えるかと思いますが、平成10年（1998）まで近鉄鵜方駅に隣接するビルの2階にありました。ボーリング場を改装してつくられた資料館です。ここは近鉄興業が、昭和54年（1979）12月、日本観光文化研究所に資料の収集調査から展示まですべてを依頼して開館した資料館です。民具の収集の開始が4月12日、その11日後には700点収集、約2か月後には収集資料が2500点に達しています。そして、7月の開館時には4500点ほどになり、その中から約2500点展示したと記録されております。この時の資料収集の方針が、今日のお話の演題に使わせていただきました「くれるものはすべてもらう」というものでした。当時、日本観光文



写真5-1 漁撈（海女漁）の用具
（志摩半島の生産用具及び関連資料 志摩市歴史民俗資料館蔵）



写真5-2 漁撈の用具
（志摩半島の生産用具及び関連資料）

化研究所の所長をつとめられていたのが、有名な民俗学者宮本常一さんでした。宮本氏は『民俗学への道』という著書の中で「私の人生は半ば旅に明け暮れた」と記しているように、年間200日以上の日々を民俗調査のために費やすこともあったといいます。宮本氏が賢島で合宿した時の朝のひと時を写したもの残っております（写真5-3）。この宿舎に多い時は20人ほどの人が寝泊まりして収集にあたったといいます。また、地図を見ながら資料収集の指示をしている写真も残っており、裸足であるこの姿が一番宮本常一さんらしい姿だとお聞きしております（写真5-4）。磯部町の池田橋付近で船を積みこんでいる様子といった、収集の写真も残っております。これは民俗資料館の展示室の構成案について検討中の宮本さんと、展示用のムシロばたを使って実演しているのをご覧になっている様子です（写真5-5）。この時つくられた、志摩の民俗資料館のパンフレットには、海に生きる志摩、くらしと道具、くらしの中のやきものについて記されています。また、開館と同時に発行された『志摩を見つける人のための志摩国風土記 志摩という国』という冊子もあります。宮本さんは、この中に「志摩という国という志摩は古来海の国であった」というエッセイを残されています。今日の演題の「小さな小さな海の国」という言葉はこのエッセイの中の言葉です。海と深く関わってきた志摩の歴史や文化が紹介された文章となっており、英訳されて今回の伊勢志摩サミットの時の贈呈品として首脳にも渡されています。

では、民具の説明を具体的にさせていただきます。これは越賀での竹籠製造について文書と聞き取りの結果を対照させることが出来ました。先ほど塚本先生のお話でもあったように郷蔵文書の中に、副業としてたくさん籠が作られていた記録があるということで、聞き取り調査を進めてきました。実際にこれを作られた

方のお話は聞くことが出来ませんでした。しかし、別に海女さんのことを聞かせていただいている方のおじいさんがこの文書の中に出てくる籠作りの親方磯和弥作さんであるということがわかりました。思いがけず、磯和さんが実際に使っていた竹を割る道具もお借りすることも出来ました。

布施田地区のシャボ浜の祭りについても、真珠貝開きとして紹介しております。地元ではタマガイカヅキといいました。5月20日の口開けの日は学校も休みになって、少しでもいい場所を確保するために朝早く競争のように一家総出で船に乗り込みました。ほら貝を合図に800人もの海女さんが一斉に潜ったといいます。オコゼに刺されたりとけがをする人も多かったそうで、お医者さんが乗り込んだ旗をたてた船が漁をする船の周りをぐるぐる回っていたそうです。また、たくさんの海女さんが一斉に潜っているために、浮上した時に他の海女さんの磯桶を下からひっくり返してしまうこともよくあったそうです。まだ5月ですので水は冷たくて飛び込むと頭がキーンとしびれたそうです。中には失神してしまう方もおられたと聞きますと、海に働く厳しさを思わずにはおられません。タマガイカヅキの話をしてもらったのは昭和元年（1926）生まれの元海女さんで、この頃はまだ子どもで、子どもなりに何とか親の助けになりたいと腰籠を持って一生懸命手伝ったということだそうです。現在のシャボ浜は青海苔養殖の杭がたてられていまして、昔のにぎわいは見られませんが、この浜の裏手にある地藏さんがまつられています（写真5-6）。手に持っているのは真珠です。シャボンさんという名前でも真珠養殖に携わる人たちの信仰を集めています。台座に昭和21年（1956）8月建立と記されていました。今回越賀の調査でお世話になった方に聞きますと、井戸の端にきれいな石がまつられていたはずやおっしゃって、夏の暑の中汗をかいて、



写真5-3 宮本氏合宿時の朝のひと時（於賢島）



写真5-4 資料収集の指示をする宮本氏

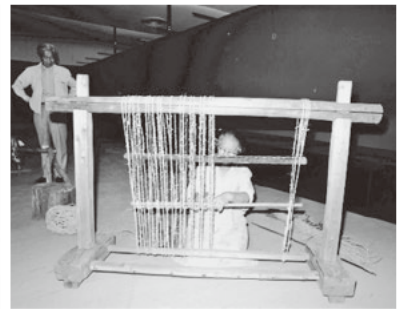


写真5-5 民俗資料館の展示室構成案を検討中の宮本氏

これを取りだしてくれました。一つの資料から、この様に広がって、様々な生業の歴史とともに地域の様子も明らかになってきました。宮本常一氏は同じことを同じ場所で、3人以上の人に聞かなければいけないとおっしゃっていたそうです。今は1人の人に聞くのがやっとで、内容によってはもう聞けなくなってしまったことも多くなってきました。

ここで紹介できない大変多くの方々にお世話になりました。どうもありがとうございました。



写真5-6 シャボンさん（於布施田）

総合討論

菅原洋一（三重大学）

塚本 明（三重大学）

門口実代（三重県総合博物館）

崎川由美子（志摩市歴史民俗資料館）

司会 北村淳一（三重県総合博物館）

【司会】

それでは、総合討論の方を開始したいと思います。ここまでの講演で、先志摩の現状や魅力などを発表いただきました。地域資源をどの様に守り活用していくかというテーマとなって参りますが、最初にパネリストの方から、報告のコメントと補足があればお願いいたします。

【塚本】

今回は、三重大学と三重県総合博物館との関係企画で、そこに志摩市さんに協力いただいたのですが、そもそもなぜ先志摩だったのかという企画の趣旨をお話しさせていただきます。個人的なことです。私は今年度に県内3つの所で古文書の調査をしておりました。三重県の北端いなべ市北勢町、和歌山県に近い御浜町、そして先志摩です。三重県の北と南西、南東との3つの端となりますが、実は県庁所在地の津から行くのに先志摩が一番遠いのです。誤解のないように少し言葉を選んで申しますが、交通とか経済といった面では、先志摩が一番不便な所なのかもしれません。しかし、それはマイナスだけの評価ではないと思うのです。交通が便利になると、どこでも同じような町になり、同じような集落になっていきます。日本全体が、どこを切っても同じ姿をしている金太郎飴のような社会になってきているような気がします。その中で先志摩という地域は、不便であるからこそ、非常に個性的な文化が残っている。そういう思いで私たちは、調査対象として先志摩を選んだのです。ですから先志摩に注目するということは、単に先志摩、あるいは志摩市だけの問題ではなく、三重県全体の、もっといえば日本全体の問題につながる。現在、地方創生という言葉がよく使われますが、本当の意味での地方創生、地域の活性化という課題に役にたつのではないと思われるわけです。そういう意図でこの地域を選んだのだということを、まずご理解いただければと思います。

【菅原】

今日はこういった先志摩の地域資源が問題になっているわけですが、それは極めて個性的であると思います。漁業の文化、それから民俗の文化からのお話をいただきましたが、私は専門が建築であります。建築について志摩を見ますと、志摩にある建築は、ただ古いとかちょっと変わっているというわけではなく、志摩にしかない、全国で志摩にしかないというのが実は志摩の建築であります。具体的には申し上げませんが、そのことはほとんど知られていないのです。

建築に限らず文化財について志摩にどんなものがあるかということは、これまで主に三重県教育委員会が中心になる調査をやってきたわけです。その時は、それぞれの市町の教育委員会におたくの所でどんなものが調査対象になりますかと照会を出すんです。その結果あがってきたものに対して、例えば大学の人間、博物館の人間が調査をするというのが通常の形です。

建築の分野では、近代化遺産というものを調査したり、近代和風建築や民家、近世社寺建築の調査と色々な調査がありますが、このように調査の時、志摩からは調査対象の候補がほとんど出てこないのです。これはいいと思うので調査の対象になりますよね、というのが出てこないんですね。そうしますと、調査がなされないので、志摩には何もないということになってきます。

しかし、実情はそういうものではないわけです。先ほどから、地元の方にとってはあまりにも日常的で、ありふれているから気にも留めていないということがありましたが、そういう所に評価されていないけれども非常に重要な文化遺産があると思っています。

今回の展示では、地元の方からも展示の間違いなども含めて色々教えていただいております。一方的にこういうことがわかりました、こうです、ということ

ではなくて、この展示に対して色々教えていただく、あるいはこれをもとにして地元の方が色々な発想を深めていくという、双方向の試みになっていると思っております。いずれにしても、志摩の文化遺産は、今はまだ正当に評価されていないということを私は感じています。

【司会】

私の方は紹介もかねてですが、この志摩の調査は門口と一緒に新しい博物館の展示を造っていくにあたって、志摩町の和具に入りまして、色々くらしにまつわるものや、私は自然系の学芸員ですので漁業について調査させていただきました。そんなことで、この地域に腰を据えて調査したくなり、実は和具に別荘を持っています。そこで漁師さんと飲んだりしながら、漁船に乗り込んで調査したり、ドローンをとばして調査したりしております。このような話もしたかったのですが、話がまとまらないので土地利用の話となりました。あとは、漁の生業であるとか、特にエビ網の網さばき、朝の7時ぐらいに皆さんがエビを網から離すのに集まってくるのですが、非常ににぎやかで活気がある、この様な集まりはなかなかないなと思っていました。そのような所から、すばらしさを感じておりました。志摩の人のぬくもりとかを感じながら、ここは楽しい場所であってコミュニティが強いなというところにも関心を持った所でございます。そういった所も含めて、魅力的な部分があれば、現状であれば陸地の方が、いろんなかけがえのない資源があるのですが、言い方は悪いですが、劣化している部分もあり、あるいは残っていて現存している、美しい部分もあると思うのです。そういう部分で、地域資源をこれからどう守っていくかということを議論していくわけです。パネリストの方から一応の補足もありましたので、会場の方から質



参考 総合討論の様子 左より北村、塚本、菅原、崎川、門口

問をいただきながら議論を進めていきたいと思います。

その前に、地元の方がどれだけおられるか、挙手をお願いしたいのですが、志摩市の方おられますか…、そして旧志摩町の方そのままで…、そして越賀の方そのままで…ありがとうございます。このように、地元の方が大変多くてわれわれうれしく思っている所です。では、わからないこととか単純なことで結構ですから、ご質問お願いいたします。

【質問 1】

とても興味深い話ありがとうございました。私は大王町出身で1950年代生まれですので、だいたい60年ちょっと前までは今話しておられたことは私も体験しておりまして、思い出しながら聞かせていただきました。本場に最近の頃まで、列島改造論がはじまる前の頃までは残っていたんだということですね。もう一つ重要なことだと聞きながら思いましたのは、志摩とか先志摩とかの物産があるということについては、伊勢商人、松坂商人が江戸や大坂に行ったということ、伊勢神宮の御師の活動など、全国へ人が行っていたということがありますね。有形文化財の基盤として、無形の文化といいますか、人脈があるということを考えると、相当また違う発見があると思います。その辺の所を研究していただきたいと思います。

【司会】

要望という所でよろしかったでしょうか。

【塚本】

ありがとうございます。先ほど海女さんたちが冬は薪を採っていて、焚き火に用いて自分たちの体を温めると同時に、余った分は伊勢に出荷したのだとお話しました。この様な関係はもっと深いものがあります。江戸時代の伊勢、神宮門前町の宇治・山田（現在の伊勢市）は、諸国からの参宮客でにぎわっていた所でした。彼らをもてなすために、宇治山田には色々な物産が集まってきます。特に御師宅では参宮客を山海の珍味でもてなします。豪勢なご馳走でもてなして、お伊勢さんのありがたさを感じさせたわけです。ご馳走の中心となる魚介類は、熊野からくるものもありますが、志摩産のものが多く、モノを介して志摩と伊勢が結びついていました。そして、それを介して志摩の人たち

と伊勢の人々との結びつきも深かったのです。

【質問 1】

志摩の人、例えば波切の人などが、オーストラリアあたりまで行っているということを母から聞いていますが。ですから、船を介して広がる社会というのはかなり範囲というのは広いですね。

【塚本】

オーストラリアに行っていたというのは、真珠貝をとりに行っている事例です。色々な形で人のつながりということはあったかと思います。それとともに、モノとのつながりがあったわけです。その中で、昔は伊勢と志摩が強く結びついていたということがいえるかと思います。それが、現状では少し離れてきているのかなと思います。

【菅原】

これはもう、伝承の類になる部分もあるのですが、弘法さんが来ていたという話があります。弘法さんの話は全国各地にあります。円空が来ていたとか、近くは野村訥斎が来ていたとか、要するにいろんな人が入って来ていたという話です。突き出した半島で、一見陸上交通的な感覚からすると不便な所ですが、いろんな人が古くから入って来ている、各地とつながりのある地域であるし、出ていって活躍される方もいたわけですから。そういう観点での志摩の潜在力というのは、もっと研究してしかるべきだと思っています。

【塚本】

今日はお話しできなかったのですが、江戸時代には先志摩の布施田とか片田を中心に、廻船の盛んな活動がありました。私は昔、熊野灘の古文書を調べておりましたが、熊野灘の漁村史料の中で頻繁に布施田舟、片田舟が登場するのです。この地の廻船の人たちは、紀伊半島、熊野灘からおそらく熱田、名古屋のあたりまで行き来をしていて、活発に取引をしていたようです。近代以降のモータリゼーション化の進行とともに物流は陸中心になりましたが、昔は海を通した物流が中心だったわけで、その中で先志摩の人たちが舟を使って人とモノを動かして、大きな役割を果たしていたということです。

【質問2】

要望ですけど、このような講演会を志摩町でやってほしいと思うのです。今日は防災訓練の講演会がちょうどありまして、それで重なってしまって非常に参加者が少なかったわけです。志摩町和具の文化会館でぜひやってもらいたいと思います。こんなすばらしい話をそのままにしておくのはもったいないと思います。それと、もう一つは越賀の郷蔵の古文書について発表いただいておりますが、これについては昔から長い間、越賀の地の人が皆守ってきた遺産であり文化であります。それについて、谷口先生が亡くなってから、途絶えて困ったことがあるのです。それで、私は和具の出身ですが、一時蔵の管理や色々なことをやって参りました。その中で、感じたことが一つあります。ああいうものは地域と共にあるものですから、出来たら地域が全員に学ぶ機会を、学校教育の中でもぜひとりあげてもらいたい。志摩の郷蔵、こんな立派なものがあるんやということが、子どもたちにわかってもらって、越賀の地元の人が興味を持ってもらえるように、一つ何とかしてもらいたいと思います。本当にこれを絶え間なく伝えるということは大変なことでありますので、越賀の人もおられますので、子どもさんも含めて守ってもらいたいというのが私の希望でありますので、この場で発表させていただきます。

【司会】

ご要望ありがとうございます。志摩町で発表ということですが、実は最初は志摩町でということ、志摩市にお願いしてございまして断られた経緯がありましてここになったのです。(会場笑)。ですので、志摩市の方でぜひ要望を出していただいて、展示も実は志摩町で行いたく調整しておったのですが、残念ながら願いがかないませんでした。すみません、余談です。本当に郷蔵は立派なもので、いわゆる公文書館的なものがあつたからこそ、かつてのことがわかる、アメリカの国立公文書館の資料がNHKテレビのドキュメンタリーなどで使われたりしていますが、それと同等の価値のものが残っているというのが本当にすばらしいことだと思います。それによって、われわれの企画展示、ああいう絵図が出てきて広がりが出て来たという所がありますので、本当に価値付けというものについては、われわれも大きな価値のあるものということは断言で

きるかと思います。

【質問3】

越賀の文書が非常に重要な文書だということは、先生方の話でわかるのですが、建築の先生もおりますのでお聞きしたいのですが、今のような所に置いておいで大丈夫なのでしょうか。付け加えますと、震災のことですが、安政の地震は9メートルですよね、越賀を襲ったのは、ところが今度の東南海地震の津波は、三重県では最大級24メートルが越賀に来ると県が発表しています。今のままで、湿度管理や温度管理等も含めて、古い文書を保管するのにいいのかなと、立派な建物があるので、そんな所で管理できないのかなということもと思いますが、どうなんでしょうか。

【崎川】

貴重なご意見ありがとうございます。古文書というのは、中性紙という古文書用の封筒に入れて、ちゃんと調湿できる場所に置くのが一番良いということはよくわかってはいるのですが、地域で守られてきたものを、別の場所に運んでしまうということは、やはり守ってきた人たちときちんとお話を進めていかなければならないことだろうと思います。このような話は、教育委員会に持ち帰らせていただいて前向きに、前向きにいつてしまっていていいかはわかりませんが、検討させていただきたいと思います。

【質問3】

湿度とか温度管理とかいうものは必要ないのでしょうか。

【塚本】

郷蔵の古文書に関しては、コンディション自体は良好です。時に誤解されるのですが、江戸時代の古文書は、コンクリート造りの新しい倉庫などに入れるとかえって良くないのでして、昔ながらの土蔵の、ちょっと風通しの良い場所の方が、保存には良いのです。

しかし、今お話にあったような、地震であるとか盗難であるとかは、私も大変心配しております。ただ、強引に移動させるのは良いことではなく、崎川館長がおっしゃったように、あくまで越賀の方々の了解が必要だと思います。越賀郷蔵文書というのは、越賀の方々

が江戸時代以来ずっと大事に守ってきたものです。その貴重な資産を勝手にとりあげるわけにはいけません。私たちの世界では、現地保存主義という考え方があるのですが、古文書は作られた所に残すのが理想だと思っております。

ただ折衷案みたいな形ですが、越賀の方々の所有物であるということを確認した上で、寄託という形で磯部の資料館に持って行って保存を図るということは考えて良いことだと思います。保存と活用に向けて一番良いあり方はどうなのか、そういったことをこれから皆様と考えていきたいと思っております。

ついでながら、守っていくための方策についても、少し申したいと思います。崎川さんから、国の登録有形民俗文化財になった農具のお話がありました。あれは実は、収集・収蔵していた志摩の民俗資料館が廃館になり、その後一時は雨ざらしになって捨てられかかっていた資料なのです。幸いそれが受け継がれましたので、この度国の登録有形文化財になり、守られていく道筋がつけられました。文化財というものは、常にそういう危機にさらされているのです。

しかしながら越賀郷蔵の貴重な古文書類は、あの立派な村絵図を含め、すべて未指定なんです。ここで皆さんにその価値をご理解いただきましたので、とりあえずしばらくは守られると思います。しかし、先々しっかり守られるという保証はございません。私は何らかの形で文化財指定をしていくことが必要ではないかと思っています。ただ、外野から見まして越賀の古文書にはそういう価値があると判断しますものの、文化財の評価はあくまで志摩市が主体となることです。市長さんもうらっしゃいますので、そういった方向でご意見をいただければ、私たちも県博さんも協力できると思います。特に県博は文書館機能を併設している博物館です。文書館機能というのは単に所蔵している文書を保管するというだけではなくて、三重県内に残っている古文書を調査し保全活動していく役割を持っているわけです。ですから、志摩市さんが主体となって、県博と三重大学が協力していく、今回のシンポジウムを發展させて文化財保全につなげていく、そういった活動が出来るのではないかと考えております。ぜひ、そういう方向に向けて、地元の方々に協力いただけると良いなあと思います。

【司会】

ありがとうございます。私も東日本大震災があった時に、公文書レスキューに行きました、博物館に照会がありまして、私行けますということで手を挙げました。自然系の学芸員でいいのかという話がありましたが、第一陣で行きまして陸前高田の公文書についてキッチンペーパーを挟んでまず乾燥させるという作業をしました。人命が先なのですが、公文書をレスキューしなければならぬというのは、あまり挙がってこない問題ですが、やはり地域の歴史とか記録ですので、そういう部分でも大事にしていいただければありがたいなと思います。他にご意見どうでしょうか。地元の方ぜひ。

【質問3】

あの、これはまた別の時代かもしれませんが、言葉のことで。以前に方言の話を聞かせてもらった時に、こちらの方の交通の便が今は良くなっていますが、不便な点がありました。そういったことから関連した問題なのですが、昔の古い京言葉、今は特になくなったような消滅したような言葉が、こういう風な辺鄙といったらおかしいですけども、こういう離れた所にまだ残っているのだということを聞かせてもらったことがあるのですが、そういう風な観点からモノなどについても残っているものがないかどうかです。京都とか中央のものの古いものが残っていないのかということ、そういう風なものがあれば、こちらも自信のようなものになると思いますので、まあ古代社会のことなのかもしれませんけれど、そういう風な観点からも考えていただいてはどうかと思います。

【門口】

ご意見ありがとうございます。言葉のことは私も関心を持ってしまして、調査をしておりますと、県内の各地域でも違いますし、旧志摩町の中でも集落によって独特の言葉があるという風にお話を聞かせていただいております。昔の使われていた言葉が、具体的にこの地域でどの様に残っているのかということは私不勉強で、お伝えすることは出来ないのですけれども、先ほど発表の中で少しご紹介をした、『和具の方言』という3巻の分厚い本があるのですが、こちら鍋島医院の先生が地元の方にかなりの長時間にわたって

インタビューの調査をされて、その日常の会話の中から和具で使われている言葉を全部広げて、それをアイウエオ順に並べたすばらしい本で、今後伝えていかなければならないような貴重なものだと思うのですけれども、そういったすばらしいものもありますし、今後そういった言葉のことも少し関心を持って、私ももう少し勉強させていただきたいなと思います。すみません、きちんとした回答でなくて。

【質問3】

これは、言葉だけの問題でなくて、モノとか建築様式とかそういったもので残っていると、そういう風な考察が加えられれば、私たちとしても自信を持って生活していけるのではないかと思いますので。よろしくお願いいたします。

【司会】

ありがとうございます。

【質問4】

私は、阿児町の立神に住んでおりますが、数十年前に文化庁が緊急方言調査というのを三重県の各地でやりまして、志摩の分を私も担当せよということで、高齢の方が集まって、色々自由にしゃべってもらって録音して歩いたということがあります。その資料は県の方にも残っているかと思います。緊急方言調査の録音資料です。このことがひとつ。それから、もうひとつは私の所は数年前に、大事な円空の志摩にしかない仏画ですね、絵画の保管場所が不審火で焼けたという不幸なことがあったのですが、その時に初代の自治会長さんで番条さんという方で、元の警察署長さんで、松阪の消防署長もされた、非常に優れた方なのですが、こんな貴重な資料は耐火金庫に入れとかないかということで、そのころ耐火金庫の大きなものを買っていただいて、その中に円空の大般若経を保管したために助かったという風なことで、それは不幸中の幸いだったのですが、地区の宝だということで、現在も新たに耐火金庫を買って保管しているのですが。越賀のあいう資料はどうでしょうか、裸の形で木造の建物に置くということについての検討というのは不必要なのでしょうか。量が多いからちょっと難しいのでしょうかね。今日の報告の写真を見させていただいて、ふっと

万が一不幸にそういった状況になった時にどうなるのかなということを感じました。以上です。

【司会】

ありがとうございます。

【菅原】

今、立神の話がありましたけれど、あれは本来入っていた薬師堂が火事で焼けて、大般若経はそこにあったけれど残ったということですね。大般若経は県の指定文化財になっておりますけれども、建物自体も非常にいい建物だったのです。薬師堂といっておりますけれども、お堂と舞台を兼ねて、地区の方が色々とお使いになっていたというもので、非常にいいものだったと思います。

ただ、そういういいものがある、というのがわかったのはなぜかといいますと、それは火事になったからです。それで初めてわかったのです。ですから、今まで何度も地元のいいものを教えて下さいという調査の機会がありました。その時出てこなかったら、こちらの不勉強で申し訳ないのですけれど、やはりどうしようもなかったんですね。もしあれが、例えば志摩市の指定文化財になっているとか、国の登録有形文化財になっているとか、あるいはなっていないにしても、大事なものが地元に残っているということがわかっていただければ、焼けた段階でも、まだ色々出来ることがあったらと思うんです。ただ、そうなっていない状態で焼けてしまってもどうしようもないんですね。

だから、私申し上げたいのは、文書であればどういう保存管理が必要かということを考えていただく必要があろうかと思うのですけれど、まず、大事だろうというものは全部リストにしていこうということです。そして、すぐには調査できないものもあるかもしれませんが、志摩市もこういう大事なものがあるということを知っている、三重県も知っている、博物館も大学も知っている状況をまず作らないと、地元にあるすばらしいものが、これからでもいろんなことでなくなっていくだろうと思います。

【司会】

ありがとうございます。ちょっと時間もなくなってきましたけれども。こちらからぜひご意見をお聞きし

たい方がおりまして、実は越賀絵図を作られた小川三右衛門さんのご子孫の小川益司さんがご来場になっておりますので、ぜひご意見、コメントをお願いいたします。

【小川】

小川三右衛門の家も没落しまして、真珠養殖で財をなした小川松太郎さんの家に絵図は保管されていた、それがなぜこちらに移ったのかなという気もしますが。明治20年代に三重県の集落を県令の名で調査をしていますよね。私も、明治20年の越賀絵図をコピーで持っておるのですが、小川三右衛門や野村訥斎の絵図を参考にしたのかなと思う程に類似しています。越賀の村絵図は非常にすばらしい絵で感動いたしました。越賀がこんなに脚光を浴びるというのは私も越賀出身として大変うれしいのです。だいたい御座、和具、鶴方、波切、大王という感じで抜けていたのですが、ところがこんなに越賀がとりあげられたのは今まで知りません。ただ、越賀にはオビヤ制度というのがあったのです。昭和45年くらいまであったと思うのです。わたしもオビヤで生まれて、妹もオビヤで生まれました。生まれたというのは、実際は奥さんの実家で皆生まれるのですが、生まれるとすぐオビヤへ行くのですね。長屋があって初めての子どもを産むと50日間、2回目3回目だと30日間とか、例えばですけれど決められておまして、そこにいろんなアワビやお魚やお米や野菜やらを持っていくのをチソウといいまして、チソウを皆持っていて、母体の保護と、子どもの育て方を先輩の出産者から聞くのですかね、そういう制度というのは越賀だけのものなのか、あるいは三重県の漁村にも散在していたのか、なぜ越賀だけがあんなに遅くまで残っていたのか、そのような考察というのがあまりされていないのではないかと思います。まだ今生きている経験者というのがまだたくさんおりますので、そういう人に聞き取りをしてオビヤというのかそういう制度というのがどういうものだったのかなというのが、個人的には知りたいと思うのです。いかがでしょうか。

【司会】

すみません。お時間がなくなりつつあるので、これは門口の宿題ということでしたと思います。

【質問5】

どうも皆さん、時間遅くなって参りましたが。先ほどから触れられていると思いますが、先ほどからお話を聞かせてもらっておりまして、1、2点というか意見なのですが、気になることがありますので、そのことをいわせてもらいます。越賀という地名なのですが、詳しくは私も知りませんが、越賀という地名がありまして、先生方のお話の中にも越賀は遠い所、不便な所とかいう言葉が出たかと思いますが、私は思うものがありました。実はこの郷倉というものが越賀にあったというのは、私の想像ですが江戸前期の頃に江戸からの廻船が日本全国に物流を運んでという時代に、志州四か津という言葉がありまして、志州というのは志摩のことで、鳥羽と安乗と越賀、そして浜島も入っております。私は現在こそ、越賀が不便な所、遠い所というイメージがありますが、江戸のその当時からすると、江戸からの航路があつて、いち早く入ってくる所で、本当に志摩国を代表するような湊であつたと思います。そんなことで、話長くなりますがそのことを付け加えさせてもらって、終わります。

【司会】

ありがとうございます。色々な要望も出て参りましたので、ここでひと言、志摩市長の方から何かコメントをお願いできればと思います。すみません。

【市長】

すみません。何か来るかなと思っていたのですが。今日は本当に貴重なご意見をたくさんいただいて、特に志摩町でやらないかんという意見はわかりますし、志摩町でまたやらないかんと思っております。今、地方創成の取り組みを色々やっているのですが、先ほどの郷倉の話もとても興味深かったですし、地元の志摩市がそのものの価値をもうちょっとしっかり確認しながら、文化財の指定ということも含めてやらないといけないなとあらためて感じました。先人が残してくれた貴重なものを、さらに活用しながら、いかしていきたいなという風に思います。そのためには、うちの館長の崎川を中心にまた、総合博物館の先生方や三重大学の先生方の力を借りながらしっかり取り組んでいきたいと思っています。先ほど、越賀がちょっと不便やなど

いう話があって、いやそうでないという話がありましたが、やはり「先ちょ志摩」というのは、先志摩はある意味で今の言葉でいうと先端であると思いますので、まさしく先端張っていると思いますので、これから、歴史を掘り起こしながらということも含めて、新種の製品や、色々ないい面を土地の人は持っておりますので、その辺を活かしながらやっていきたいという風に思いました。今日は有意義な催しとパネルをやっ

【司会】

ありがとうございました。時間がやって参りましたので、しめさせていただきますのですが、地元のかけがえのない資源をどう活用して守るか、地元の皆さんが主体となって守っていくかということになるかとおもいます。そういった色々な資料について、かけがえのない資源について、われわれ三重大学や博物館は価値づけは出来るのですが、それを志摩市の地元の皆さん

んが保存していく、どう活用したいかと思った時に、われわれはお手伝いすることはできますので、また色々ご相談いただければと思います。今回、めずらしく、公文書、いわゆる行政文書であるとか、昔の文書を守りたいというある程度そういった共通の意識を皆さんと共に共有できたかと思います。震災などからいわゆる公文書を守るという観点が、地元から生まれてくるというのはなかなかないと思います。その文書をこれから、このシンポジウムを契機に進んでいくといいなと個人的希望を思います。

近い将来、志摩市共催ということで志摩町越賀、和具文化会館で、郷倉文書、地元の資源をどう活かすか、伝えるかということシンポジウムでお会いできることを願ひまして、このパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。司会の不手際および、講演者の話が長いということで時間がオーバーしましてご迷惑をおかけしましたが、どうもありがとうございました。

【主催者挨拶】 三重県総合博物館館長 大野照文



本日はお忙しい所、大勢の方に集まっていたいてありがとうございました。三重県総合博物館の館長をおおせつかっております大野と申します。わたくし、ずっと京都に住んでおりましたが、去年の4月に前館長の布谷先生のあとをうけまして三重に参りました。最初に私が三重県に来たのは1975年のことです。そのころ国立真珠研究所というのがありまして、和田浩爾先生という世界的に有名な先生がおられました。その和田先生にドイツから著名な学者が会いに来るということで、その通訳、道案内ということで私もここまできておいしいものをいただきました。それがきっかけで私はドイツに留学することができたので、まさにこの地には恩があるということに気付きました。ありがとうございます。さて、モノが残っているということが極めて重要なことであるということについて、皆さんと今日認識を新たにすることができました。越賀の郷蔵には1855年にはすでに越賀村の絵図があったことで現代までの土地利用の変遷

がわかる、また文書からはそれから海女さんの出稼ぎということもわかる、そして海女さんが出稼ぎに行ったことで、どうも田畑がおろそかになったといった、色々な可能性がわかってきました。それから、民俗につきましては、シュウトヤガヨイというすごい風習があるということを知ったわけですが、そういった文化的な社会的な意味というものこれから調べていかなければならないということになります。それから、オビヤ制度という母子の健康を地域でさらに増進するようなこともあったということをお教えいただきました。重要なことは普通のくらしやそれに付随する文化などが有形民俗文化財として指定を受けたことです。志摩の普通のくらしに関するものが、日本の文化の証のひとつとして指定を受けたということになります。この地域の歴史やそれを支えた文化、さらにはその基盤にある自然の豊かさというものを実証しているのではないかと思います。ただ、東南海沖地震なども懸念される中で、モノをどう保全していくかということも大きな課題であるということをお教えいただきました。さて、博物館の意味と同じことなのですが、古いものを大事にするということは、古いから大事ということではないわけです。古いから大事なのだったら、例えばこの辺の地層は何億年も前の地層であるから全部大事にしなければならないということになってしまいます。そういう意味では、古いものをなぜ大事にするかということ、そこから読み取ったことが未来にどうつながるかということだと思います。そういう意味では三重大学さんがCOC+をとったということ、つまり地域の中核の大学として有用な役割を果たしていただくということと、わたくしどもの博物館MieMuが3年前にオープンしまして、手前味噌ですが私が着任する前から前館長の布谷先生が非常に優秀な学芸員を揃えていただいておりますので、私は結構うちわでやっております。こういった人材もおります。そして、今後は大学の学生さんなども含めて調査などを行わせていただいて、地元の皆さんと連携させていただく必要がございますので、われわれも頻繁に志摩を訪れるということをおさせていただければと思います。当館はまだできて間もないので、県の方でも入場者数を以てその価値をはかるということしか、まだ知恵がないのです。今日は市長さんもお越しいただいておりますので、博物館は全県を相手にしているはずなので、入場者数のみではかるということは、それはいかがなものか、三重は南北に長く、東西にかけても、文化も異なりますから、そういった所を含めて、広く私どもは調べて三重の県民の皆様の発展に尽くしたいと思いますので、博物館って何する所なのということを県の方にも、私たちの方にも強い問いかけをなげていただければと思います。いずれにしても、この数年間にわたりまして、様々な調査を皆さんとさせていただきまして土台に、さらに深く広く調査を行い、それがこの地域、三重の発展に多少なりとも役立つことを念じまして、この挨拶を終えさせていただきます。最後に、お世話になりました関係者の皆さんにお礼を申し上げまして挨拶を終えさせていただきます。どうもありがとうございました。